

藤本寄付金による都市緑化

故藤本富子理事はかねてより「遺産が都市緑化などの公益に有効に活用される」ことを願っておりました。納骨された一心寺はお骨仏の寺として有名で、その寺内地を中心に上町台地の緑化の推進がされており、昨年、門前に大きなクスの木などを植栽整備されました。その一部分にご遺志により大きなシラカシ一本を寄進しました。

また、彼女の終焉となったマンションから見下ろせる羽鷹池公園に八重桜三本シマトネリコを植栽して、豊中市に寄贈し、さらに、服部緑地の都市緑化植物園にも、ハンカチノキ、ベニバナトチノキ、ヒトツバタゴノキなどの珍木が寄贈されております。春から初夏までの良き日に、花見に訪れられては如何でしょうか。



羽鷹池公園



ハンカチノキ

国際的な調査研究に藤本助成金を交付することになりました。

本年度の募集期限は7月10日（金）までとします。折込の交付要望書に必要事項を書いて事務局までお送り下さい。

- （目的） 国際造園研究センターの藤本富子元理事から遺贈された寄付金により当法人の会員等の海外における環境文化に関する現地調査研究に要する費用を助成する。
- （対象） 助成対象者は当法人の会員及び会員の推薦する者とする。
- （募集） この助成は、会報において公募する。
- （選考） 応募者の中から、法人の事業委員会の国際部会において審査、理事長の承認を経て決定する。
- （期間・金額） 公募は平成21年度から23年度までの三カ年に、年一回とし、助成金は年額20万円以内とする。
- （交付） 助成金は、助成者の決定後直ちに支度金として決定の半額、帰国後報告書の提出により残額を交付する。
- （公開） 報告書の概要を当法人のホームページに掲載する。

<会員向けホームページ開設のお知らせ>

かねてより、当センターのホームページにて、イベントや庭園の情報を発信してきましたが、このたび会員の皆様により有益な情報をご提供するための会員専用ホームページを開設いたしました。現在、「会員向けのイベント案内」、「会報(1号～6号)」、「ランドスケープ紀行」と題した各国の風景等を掲載しております。今後もいろいろと有益なコンテンツを追加していきたいと思っておりますので、ご意見ご感想をお待ちしております。なお、会員向けホームページを閲覧するために必要なIDとパスワードは会員の方に別途郵送させていただきます。

通常総会

平成20年6月17日（火）午後5時から、以和貴荘（はもにー）において平成20年度通常総会を開催した。総正会員72名の過半数57名の出席となり、本総会は成立した。清水理事長を議長として、議案、平成19年度事業報告および決算報告、平成20年度事業計画案および収入・支出予算案は原案のとおり可決された。

総会に先立って、国際交流の関西の拠点である関西空港の二期空港島の整備状況を、関西空港造成株式会社の大井総務部長のご案内で視察し、その後事業実施の始まった泉佐野丘陵部緑地を訪れ計画の説明を受け、岸和田市にあるとんぼ池公園のあじさい園を見学した。

事務局だより

□新入会員のご紹介

個人正会員	金田 篤 毛藤 閑彦 澁田 正幸
	高橋 康彦
友の会員	石井 智子 佐藤 泰 千葉 教代
	正岡 真喜子

□ご寄付・賛助金

次の方々よりご協力いただきました。有難うございました。

	荒木正典	10,000円
	藤田貞吉	10,000円
故	藤本富子	500,000円
	井上よし子	10,000円

賛助金

（社）道路緑化保全協会 西本 泰久

<ご入会の案内>

当センターは都市緑化への協力に努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10000円	10000円
団体正会員	50000円	30000円
賛助会員	30000円	20000円
友の会	免除	3000円

<ご寄付のお願い>

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆様のご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。

□編集後記

◇セミナーの「環境都市」耳慣れない言葉ですがバイオマスについての提言はテレビの特集などでもしばしば見るところです。地球環境や生物多様性の保全など、「小さくても今できることから」始めていきたいものです。
◇今号では「藤本助成金」をご紹介します。ご遠慮なく問い合わせくださいますように。（藤田）

会員向けホームページ <http://www.klrs.org/member/>

NPO法人 国際造園研究センター

〒530-0047 大阪市北区西天満4-5-5（マーキス梅田201）
TEL/FAX：06-6363-3374
ホームページアドレス <http://www.klrs.org/>

NPO法人

国際造園研究センター会報

No.6

2009

6月 発行

地球温暖化を考える

今年の桜の開花は、3月に入ってから気温が急に高くなったせい、例年よりも少し早くなったが、花の散るまで日和もよくて桜の花見には絶好の一週間であった。堂島川から大川端の桜の下は、花の宴に花見の人々が集いそぞろ歩きを楽しんで、太陽の変わらぬ恵みと春の息吹を身近に感じ取っていた。近年、スモッグの発生がなくなり、大阪は煙の都を返上し、水の都に衣替え中である。

平成21年度の環境統計によると、大気中の浮遊粒子状物質の濃度は改善傾向にあるが、森林などに被害を及ぼす酸性雨のPHは9年度の4.8以来横ばいで18年度には4.7に下がっており、光化学オキシダントの注意報の延日数は12年度の259日を最高にして減少気味ながら19年度は220日であった。また、南極のオゾンホールは面積も18年の3,027万km²を最高にして2,400万km²との間を上下しており、大気汚染はまだまだ改善されていないようだ。

環境基本計画の重点分野の中でも特に大きく取り上げられているのが、地球温暖化防止のための温室効果ガスの削減である。その削減を先進国に義務づけた京都議定書を採決した議長国としては、日本の「'08～'12年度の平均で'90年度比6%削減」の実現に尽力するのが当然だといえよう。地球温暖化による大きな影響は、融氷と小さいながら水の膨張による相対海面の上昇にある。海岸の砂浜は浸食され、洋上のサンゴ礁の島嶼群は海没し、高潮の氾濫域が拡大するという。さらに、地球の地域ごとによる気象が変化し、熱帯収束帯の北上により夏雨地帯における降雨の増大と冬雨地帯の乾燥化が予測されている。

一方、作物の乾物生産力を増大し、作物栽培可能域の拡大をもたらすという利点がある。景気のよい良い時代と不景気の時代が交互に約40年から50年の周期でやってくるという説と気温との相関関係を調べた結果、それぞれの10年前に景気の良い時代は気温が高く悪い時代は低かったとされており、江戸時代には冷夏による米の凶作後20年程すると人口が減り、気温が上がれば作物が良くなると約20年後に人口が増加していた。近年の温暖化は、好景気と連動していないが、人口の世界的な増加に関連しているのではなかろうか。世界人口は、前世紀の初めには16億人であったのが、世紀末に60億人を超え、今では68億人に達しようとする勢いであり、2050年には100億人にもなると予測されている。これまでの人口増加に対応する食糧増産を行ってきたが、地球上の農耕適地に限りがあり、作物の品種改良や栽培技術の向上にも限界があろう。したがって、殖え続ける人口を養うには食糧が不足する時機が遠くない将来にやってくるのではなかろうか。化石燃料や鉱物資源も枯渇していき、バイオ燃料や太陽エネルギーの効率の良い活用がなされない限り、現在の生活水準を維持することも難しくなろう。



バイオ燃料のもとヤトロファ

さらに、今も減少しているのが世界の森林である。農牧用地の開発や木材利用のための伐採などで熱帯林を中心に平成12年からの5カ年の平均1,290万haが失われており、植林による増加分を引いても年730万haと日本の国土の五分之一に相当する面積の森林が消えている。熱帯林はとくに多種多様な動植物を育ててきた。この森林の消失は、多数の未知の野生生物の消滅をもたらす。比較的よく調べられている維管束植物でも未だ十萬種ほど確認されていないという。たとえ、残地に人工造林を行っても何世紀もかけて構築された生態系は短期間では復活することは不可能であろう。

わが国に自生する維管束植物は、約5,500種を数え同じような気候の米国の東北部やニュージーランドの種類数よりはるかに多い。このように植物に恵まれたわが国でも、レッドリストによると、その一割ちかくの523種が絶滅

の危機に瀕していると指摘されている。この生物多様性の保全などのために、昨年生物多様性基本法が制定され、野生動物の生育生息する環境を包含した種の保全を実施することになっており、今後の成果を期待したい。温暖化が進めば、雪線が北上あるいは上昇し、氷河期から蛇紋岩や石灰岩の山地に残存する植物も消滅することになろう。夏の日本アルプスの山行を楽しませてくれるお花畑は是非残すべき高山植物の生態系である。

（清水 正之）

第4回セミナー（混乱の環境世界を生き抜く造園パラダイム）

地球温暖化に伴う生物環境の悪化が現実になってきた今、われわれ人類の未来のためにも地球生態系を守り良好な生活環境づくりを考え、話し合うセミナーを 2月27日 午後2時から5時まで、大手前のドーンセンターで開催。地球環境問題対策として「資源循環のまちづくり」をすすめている吉村元男氏、「里山再生」の学術・技術に取り組む大野智子氏を講師にお招きいたしました。出席は清水正之理事長ほか会員約60名。質疑を含めて3時間という制約のため残念ながら駆け足に終わった感は否めなかった。

いまなぜ「天ぶらカー」なのか？

—環節都市が開く未来—

講師のお一人、鳥取環境大学客員教授吉村元男氏が掲げたテーマは「環節」であった。7年間にわたって同大学で学生たちとともに実践し、研鑽してきた貴重な報告である。大胆に要約すれば、「環節」都市つまり太陽と土地の恵みで生きるミミズ（節足動物）型の都市—再生可能な資源である植物を核として、Think globally, Act locally の精神で持続可能な町づくりをしなければならない、というのである。

「天ぶらカー」とは天ぶら油の廃油でうごかす車のこと。町全体で実行すれば「油田を開発したのと同然」というわけである。実際に研究グループは鳥取県下の町中で「天ぶらカー」を走らせ、大学は廃油で走る市民のための送迎バスを寄贈した。発想は100年前、ルドルフ・ディーゼル博士がピーナッツの油で自ら開発したエンジンを動かした。この原点に戻ろうというわけである。「皆様のご家庭が油田です。」という呼びかけに説得力がある。

グループの活動は、廃油＝生物資源（バイオマス）に留まらない。アオサギやカルガモがやってくるようになったビオトープづくりや、土地の子供たちを動員して間伐材を切り出し、大小のドームを建てた。森林も竹林も放置したままではエコにつながらない、というのである。さらにCO₂の削減努力は京都議定書クラスのものではどうにもならない。地球の生態系は急速に劣化し続け、CO₂は50年までには50%削減せさせなければならないと主張する。

吉村氏の報告には、環境問題に関して、地域格差の解消・振興策に及ぶ提言もあった。しかし、小紙では全容をご紹介しきれない。簡略なレポートに止めざる得なかった。

「アジアの暮らしと竹の景観」

吉村氏に先立って報告されたのが表題の大阪府立大学大学院助教授 大野智子氏の研究成果である「アジアの暮らしと竹の景観」。中国やアジアの各地で竹林が拡大し、逆に里山が縮小されつつあるという。日本では近畿地区以西で著しく、食用も含めた積極的な竹林の活用が待たれている。森林の間伐に欠かせないのと同様、竹林も自然のままに放置したのでは、環境問題の解決にならないというのである。両講師には数名の会員が質問に立ったが、これも時間の制約に阻まれた。5時から開かれた懇親会では、質疑の続きでもり上ったことと推測される。

（藤田 貞吉）

庭園研究会

近藤公夫 奈良女子大学名誉教授 「作庭記」について10月31日に午後6時から8時までご講演して頂きました。

橘俊綱の著した「作庭記」については、平安・鎌倉時代の寝殿造り庭園の技法について、数多くの研究がされ、その詳細が発表されている。しかし、近藤教授は、その根底にあるのは造園の技法・手法ではないと主張する。少なくとも技法は、一義的なものではないと。「人のたてたる石は生得の山水にまざるべからず」という原文をひき、「作庭記」はそもそも「自然の景観を至上とする姿勢」を貫いているものだと言及する。ただし、その姿勢の中にあって、人智をもってする修景のための「人為の自由を容認する」態度を保っているのだという。もちろん「作庭記」が「計画総論」「計画類型論」「作滝技術」「作流技術」「立石技術及同口伝論」「植樹技術及作泉技術等」諸章に分類されていることは周知のこととした上のことである。大胆に要約すれば、多くの研究者が「柱」と考えてきた「技法」はむしろ二義的なものであり、第一義は「自然を至上とする姿勢」であると記している。（日本造園タイムズより要約）



北陸庭園研究旅行

平成20年12月7日（日）と8日（月）、二日間の日程で庭園研究旅行が実施された。国際造園研究センターでは日帰りでの庭園研究は数多く行ってきたが、宿泊をとまなう庭園研究は長い間望まれつつも実施にまでは至っていなかった。今回、いよいよ一泊での庭園研究旅行、25名の参会のもと豪華観光バスでの出発となった。行き先は福井一乗谷朝倉館跡庭園と滋賀朽木旧秀隣寺庭園を2本の柱とした北陸庭園研究旅行である。行程をあげると1日目は一乗谷朝倉館跡（福井市）、養浩館（福井市）、2日目は気比神宮（敦賀市）、西福寺（敦賀市）、熊川宿（伝統的建造物群保存地区・若狭町）、旧秀隣寺庭園（高島市）と贅沢なものとなった。



一乗谷から養浩館へ向かい、福井市内へと近づくにつれて雪は少なくなった。養浩館には所々残雪があるのみであった。養浩館は福井藩主松平家の下屋敷で、作庭は江戸初期吉品の頃である。残念ながら見どころのひとつである流れは工事中であったが、全体的な印象としては朝倉館址庭園と比べて石組みが小ぶり、主役が石組みから植栽へと移行しているようである。1日目の寒さを癒すには、芦原温泉はすばらしい宿であった。初めての1泊研究旅行、その醍醐味を楽しい酒宴のひとつで味わった。2日目は南下し、敦賀へ。越前国一之宮気比神宮に立ち寄り、日本三大木造鳥居のひとつを拝見して西福寺庭園へと向かう。

西福寺庭園は江戸中期の作庭と伝えられる極楽浄土の庭で、国の名勝に指定されている。若狭街道熊川宿に立ち寄りつつ、旅の最後となる見どころ旧秀隣寺庭園へと向かう。朽木の旧秀隣寺庭園は現在興聖寺の境内となっている。朽木谷は朽木氏の領地であり、作庭は植綱のときである。足利12代將軍義晴が京を追われ、管領の細川高国とともに1529年に朽木谷の朽木植綱を頼った。これを受け入れて將軍の居館をつくり、その際に庭園は細川高国の意匠によって作庭されたという。起伏の少ない庭園だが流れを巡らせ、大胆に配された大きな石が護岸を形成し、激しくも落ち着いた雰囲気をつくっている。日が暮れるまで眺めているに十分足る名庭であった。名残惜しくも帰阪の途につき、国際造園研究センター初の1泊北陸庭園研究旅行は無事、すばらしい旅となって終了した。

（浦崎 真一）



諏訪館跡庭園前

前日の降り積もった雪のため一乗谷は真っ白だった。一乗谷は越前朝倉氏7代孝景（敏景）が1471年に移り、以後5代にわたって1万人の城下町を形成していたといわれている。朝倉館址庭園、諏訪館跡庭園の見どころは豪快な石組みであるが、雪に覆われた姿はその豪快さを減らし、丸み帯びていた。石組みを見るという目的からすればいささか残念な景色といえるが、雪国北陸である。作庭当時も一年の内に何ヶ月も雪をまとった姿となっていたであろうから、これもまた北陸の庭園のひとつの景色と考えて愛でるのがいいのかもしれない。



旧秀隣寺庭園

総会前の見学研修会で泉南地方の開発、整備状況を視察しました。



新設された二期空港島に着陸旅客ターミナルへ



多彩なみどり景観とみんなで楽しみ育む公園づくりを目指す泉佐野丘陵部緑地



府宮とんぼ池公園